

松江城の縄張りについて

城郭史グループ 山上 雅弘
(兵庫県立考古博物館)

はじめに

関ヶ原の合戦（1615）の恩賞によって堀尾吉晴は出雲・隠岐の大名となり、当初は尼子氏以来の月山富田城を居城としましたが、慶長12～16年（1607～1612）にかけて松江に新城を築きます。しかし、この築城前の慶長9年、藩主である息子の忠氏が亡くなり、孫の忠晴が藩主となります。幼少であった忠晴は吉晴の後見によって築城を実施することとなります。

元和6年～寛永10年（1620～1633）頃に作製された「堀尾期松江城下町絵図」（島根大学附属図書館蔵）によって築城当時の松江城の姿をみると、松江城及び城下町（武家地・町人地）の姿が描かれていますが、ほぼ江戸時代に見る町の姿が出来上がっていたことがわかります。つまり近世松江の城郭及び町は堀尾氏によってほぼ確定していたのです。そこには堀尾氏の並々ならぬ思いを感じることができます。



1. 縄張り

まず、松江城の基本的な縄張りを確認したいと思います。松江城は三坂山山地から宍道湖に張り出した亀田山（標高28.4m）に選地されました。築城は、亀田山周辺および三之丸を囲んで内堀を巡らし、城郭域が確定されました。主要な郭は頂上に本丸、南側に二之丸、本丸の東側の山裾に二之丸下ノ段が配置されました。さらに、本丸の北側には北之丸（現護国神社・上御殿跡）や城山稲荷神社などが立地する平坦地があります。また、本丸西側は西内堀との間に後曲輪・外曲輪などと呼ばれた郭がありました。一方、南側は三之丸とその西側に御花畑がありました。このうち御花畑を除いた範囲が城郭域と考えられます。さらに、外郭には町を囲む堀として西側に中堀があり、東側の米子川および西側の四十間堀が外堀の役割を果していました。^(注1)

そして、亀田山周辺の郭で特徴的なことは、北之丸（現護国神社・上御殿跡）や城山稲荷神社、後曲輪・外曲輪といった北側や西側の郭には石垣がほとんど見られず、郭造成も簡易で、重要な施設が置かれた形跡がないことです。むしろ、自然地形をそのまま残しているといってもいいぐらいです。さらに、天守・櫓などの配置についても天守が東側に寄り、本丸の祈祷櫓・武具櫓、二之丸の太鼓櫓・中櫓・南櫓などが東面に集中します。このように松江城の景観は、東側を重視した構造となることも特徴的です。^(注2)

さらに、東側が重視される点は、大手道の配置や石垣の構築にも如実に現れています。東側の石垣は高石垣で構成され、高さも10m前後のものが多く、大規模で整然とした石垣が築かれています。

また、大手道についてもこの点は同じです。大手道は城の南東側、柵門から二之丸・本丸へと上るルートを通ります。まず、城外から柵門を潜ると馬溜と呼ばれる広大な虎口空間に入ります。ただ、虎口空間とはいっても1つの郭といえるほどの大きさがあり、ここからはそびえ立つ高石垣や天守・櫓群（太鼓櫓・中櫓・南櫓）を望むこととなり、この虎口が松江城の玄関口であることを強く印象づけています。

さらに、馬溜の北奥には櫓門形式の大手門（南惣門）が江戸時代にはあったようです。一方、これに比べ西側の通路や門には大規模なものや格式を強く意識したものは認められません。

2. 慶長期、西国大名の築城

【築城時期と入国】

松江城の概略を確認しましたが、次に西国大名の築城についてみておきたいと思います。慶長期は、関ヶ原合戦によって領地を獲得した外様大名たちによって、全国的な新規築城に沸いた時期でもありません。西国の主な外様大名の築城を上げてみると次のようになります。

慶長6年（1601）には姫路城（～同14年）・高知城（～同16年）・福岡城（～同12年）・熊本城（～同12年）・小浜城（～寛永19年）、慶長7年には伊予松山城（～寛永4年）・小倉城（～同13・15年天守上棟）・佐賀城（～元和元年）・今治城（～同9年）、慶長9年には萩城（～同13年）・津山城（～元和2年）となります。（なお、括弧内の～年は一応の工事が完了した年です。）

ここで特徴的なのは、多くの城郭が慶長9年までに築城を開始し、松江城が築城を開始する慶長12年前後には、外様大名の築城は一応の工事を終えたものも少なくない点です。つまり、松江城の築城は開始がやや遅れた印象が強いのです。ここで思い出されるのが、松江築城に当たって吉晴・忠氏父子の間で候補地をめぐって意見が喰い違い、忠氏の急死によって吉晴がこれを受け入れた逸話です。この話の真偽は別として逸話の裏側には新城の候補地や工事方法について藩内で議論があったことが推測されます。おそらく、実際の築城開始について足踏みする要因があったのでしょう。

ここからは推測ですが、その1点目は堀尾氏が領主として移封後すぐに領内に影響力を持ちえたのかどうかという点です。富田城では出雲国内を治めるには限界があったのですが、地縁のない堀尾氏ではいきなり領地の奥深い場所に移るのは無理だったことが推測されます。次に、私が大きな問題だったと推測するのが地形の問題です。亀田山そのものは丘陵上にありますが、周囲は湿地が大半を占めており、郭や武家屋敷が立地する上ではかなりの工事を要することが予測され、その工法や選地プランについて躊躇があったと思われるのです。さらに、藩主の急逝も影を落としたでしょう。つまり、こういった要因が重なって築城に二の足を踏む時間が長くなった結果、藩内に意見対立を生む結果となったのではないのでしょうか。これが、築城開始が慶長12年まで遅れた真相ではないのでしょうか。ただ、この出足の遅れが後々の松江城の築城に大きく影響を及ぼしたと思えます。

【慶長期築城の諸特徴】

この時期の築城の特徴としては、次のことが考えられます。

①慶長期（1596～1615）、関ヶ原合戦から大坂の陣までの期間は、新たに領地を得た大名たちの築城が慶長6～9年頃までに開始されます。しかし、その工数の多くは彦根城・姫路城などの幕府方ないしこれに近い大名の城郭では第1期工事と呼ぶべきもので、元和・寛永期（1615～44）に第2期の追加工事が行われることが一般的でした。一方、外様大名では元和の一国一城令（1615）によって城の築城は規制を受けることとなってしまいます。従って、着工が早く元和年間までにさまざまな工事に着手できた城郭では、城の背後に至るまで高石垣や建築物を構築できましたが、着工の遅れた松江城ではこれが叶わなかった可能性があります。

②公儀の援助による築城である彦根城のような城郭の築城でも、慶長期の築城箇所は限定的で、築城工事には長い時間と多くの労力を必要としたようです。^(注3)

③多くの城で古材の転用や、旧石垣の転用など、旧城の資材や縄張りを活用することは一般的に行われており、こういった現象は当時では一般的なあり方でした。②と③からは、当時の築城にとって工事

実施や資材の調達が現在の感覚とはかなり異なって、制約の多いものであったことが推測されます。

④新興大名たちの築城は、旧主の勢力や地域有力者たちの反発がかなりあったと予測されます。このことは土佐の浦戸一揆などで知られるとおり、史料にはあまり現れませんが、松江城においても注意深く検討する必要があります。

さらに、縄張りの特徴としては、次のような点が考えられます。

①元和期以降のような、全体に方形を意識した縄張りの城郭が、まだこの時期は未発達な段階でした。特に松江城のように丘陵を取り込んだ城郭では、中心部が不定形な形状になりやすいようです。

②本丸の詰め城化が進行する過渡期で、御殿の場所とともに徐々に本丸が空間地化する傾向がありました。

③枳形虎口が採用され虎口空間の大規模化と門構造の恒久化が進みますが、定型化したものではなく、バリエーションが見られます。その城独特のものが多く特徴的な築城が各地で見られました。

④一般大名の築城においても大手道が他の登城道と区別され、防御的な側面と、権威と格式を意識した側面の両面から特別な道として整備され、意識的に大規模化が計られました。

③については、この後に登場する親藩・譜代の平城である篠山城・名古屋城・明石城・尼崎城・高槻城などが典型で、強く方形が意識されています。慶長期はこの現象がまだ過渡期で、方形化や詰め城化・枳形の定型化などの諸要素は未完成であったようです。

3. 松江城の検討

以上、築城と縄張りについて基本的なことを確認しましたが、ここからは松江城に戻って縄張りを検討してみたいと思います。

【大手道と枳形虎口の問題】

松江城の大手道は他の通路に比べて特に厳重で大規模に構築されています。これに加えて、天守や櫓群など周囲の構造物との景観もこの道を意識した設計となっています。こういったことは、高知城の大手道の通路幅や、津山城の幅10m以上の大手階段にも共通するところですが、時代は少し下りますが、鳥取城でも大手の枳形から二の丸への登城道があり、近年この復元に向けた整備が進められています。こういった構造は織豊期ではもっぱら信長・秀吉などの天下人の専売特許でしたが、この時期には一般大名の居城でもかなり意識しているようです。

さらに、登城道に合わせて大手門に相当する部分には大型の枳形が整備されることも一般的でした。ただ、こういった枳形は戦国時代に発生し織豊期城郭へと段階を経て発展した遺構といわれてきましたが、実際には整った方形の空間と、高石垣で周囲を囲む形態は慶長期頃からのものと考えられます^(注4)。さらに織豊期から慶長年間の前半頃の枳形には前門（一の門）に高麗門、後門（二の門）に櫓門のような定型化したものばかりではなく、前門（一の門）を欠く事例^(注5)や、大型の櫓門（もしくは楼門）の前に前庭空間を持つだけのものなど、バリエーションがあったようです。こういったバリエーションがなくなり画一化が進むのは大坂の陣（1614～15）後の元和年間以降^(注6)ではないかといわれています。従って、この時期の枳形には独特のものが多く、松江城の大手虎口が広大な空間を占めて、見るものを圧倒する構造を持つことも、この時期の特徴と考えられます。ただし、大規模化は防御的な側面（もちろんそのことも充分意識はされていますが）のみでこのような構造になるのではなく、権威や格式を意識した発想も大きく影響を及ぼしていると考えられます。また、松江城全体でも、一の門・二の門が揃い、方形の虎口空間をもつ典型的な枳形は存在しません。この点は姫路城の内堀内^(注7)や高知城においても同様のことが言えます。慶長期末～元和期頃以降に見られるような定型化した虎口構

造はまだ一般化していなかったのです。まさに松江城の縄張りの特徴はこの時期の時代を反映していると考えていいでしょう。

【方形プランと慶長期築城】

松江城の城郭部分においては“表側”である東側や三之丸などを見る限り、方形プランをかなり意識した縄張をもつといえます。このことは城下町の碁盤目状の設計ともあわせてみると、原則的には方形を意識することを目指していることがわかります。しかし、亀田山の北・西側では不定形な地形が放置されたままですので、方形プランが貫徹した状態とは言いがたい状況です。この点は、やはり高知城・姫路城をみても共通しています。一方、慶長14（1609）年築城の篠山城、同15年築城の名古屋城、元和3（1617）年築城の明石城などでは台地や丘陵を無理やり改変して方形の郭を造っています。従って、単純に松江城の工事が実施されなかったというのではなく、松江城築城の段階はこのような徹底した築城の考え方が生まれる前夜だったために、工事の実施に積極的になれなかったとも考えられるのです。この点においても松江城の縄張りは慶長期の特徴を示しています。

【詰の丸となる本丸】

さらに、本丸に目を転じてみましょう。本丸の内部には前述の『堀尾期松江城下町絵図』ではいくつかの建物が描かれますが、御殿はなかったようです。つまり築城当時から本丸は、天守を中心とする詰の丸であったことが推測されます。しかし、その割に本丸は広い面積を有しています。ところで、姫路城では池田期に天守の前面にある備前丸に御殿があったといわれます。また、彦根城でも本丸の天守前に元和年間までの短期間、御殿が置かれてましたが、その後山麓の二の丸に移っています。鳥取城も二の丸が御殿となりますが、山麓の最上段の郭は天球丸で、この郭はどのような機能を持っていたかは明確ではありません。山頂の郭が手狭であるため山麓に御殿を移すという事例もよくあることですが、多くは元和年間以降に行われています。例えば、先ほどの姫路城は元和年間に三の丸に御殿を移動しますが、明石城でも寛永8年（1631）の本丸御殿大火によって御殿を三の丸に移しています。

このように、実は近世城郭では本丸が詰の丸として象徴的な空間となる現象が慶長期以降には進行しました。ただし、例外もあります。例えば津山城は築城以来、本丸に御殿が維持されています。さらに広島城も本丸御殿のままです。これらの城郭では周囲の土地利用が確定しており適当な移動場所がなかったことが予測されることと、もともと広い面積の本丸が確保されていたことが、移動しなかったことの理由として考えられます。しかし、その意味で言うと当初から詰の丸を計画していたとするならば、松江城の本丸は広すぎる気がします。高知城の本丸は天守のみが建ちますが、あまり広くありません。一方、明石城は元和4年の築城ですが、元々本丸御殿を建てるために広い面積を確保していました。松江城の場合も、御殿施設が本丸に構築されても、広さからすれば不思議ではなかったはずですが、これらを考え合わせると、松江城では本丸において何らかの方針変更が起こった可能性を私は考えたいと思います。つまり、松江城の本丸は当初、御殿を設置することを計画したものの、途中で二之丸に変更したのではないかと思うのです。あくまで推測ですが、このように考えれば、本丸の広い空間を説明できるのではないのでしょうか。

【その後の築城】

慶長期の松江城の築城は他大名に比べても遜色のないものだったと思われます。さらに、城下町についても大規模な設計と短期間のうちに広い面積の造成工事を実施しており、その後の松江の町の発展にとって大きな恩恵となったことが考えられます。そして、このことから築城と町造りにかける堀尾氏の強い意気込みが垣間見えてきます。

しかし、城郭を見ていて思うのはその後のことです。彦根城や姫路城における元和年間以降の築城が

松江城でも行われたのでしょうか。結論から言いますと、規模の差はありますが、あまり積極的に行われなかった可能性が高いでしょう。

堀尾氏のあとに京極氏が藩主となります。わずか4年の治世であったのですが、多くの土木事業を行ったことが伝わっています。^(注8) とりわけ、土木事業では京極忠高が若狭土手を建設したことが印象的に伝わっていますが、京極氏のみ的事跡という点は何か不自然です。現代でもこのような大規模な土木工事は設計から始まって完成までには長い時間を要します。おそらく、縄張りや事前の準備を含めるともう少し時間が必要だったと考えたほうがいいでしょう。そうすると、こういった土木事業は堀尾氏の段階からさまざまな計画が進められ、若狭土手の工事も着手直前の段階にあったと考えるほうが自然です。つまり、堀尾～京極へと藩主家（家臣団も含めてですが）の交代はあるものの、インフラに対する公共工事は中断なく続けられていたことが推測されるのです。こういった事業が領内において優先されたことや、元和の一国一城令(1615)による幕府の統制によって、城郭内の西・北側の築城は放置されたのではないのでしょうか。

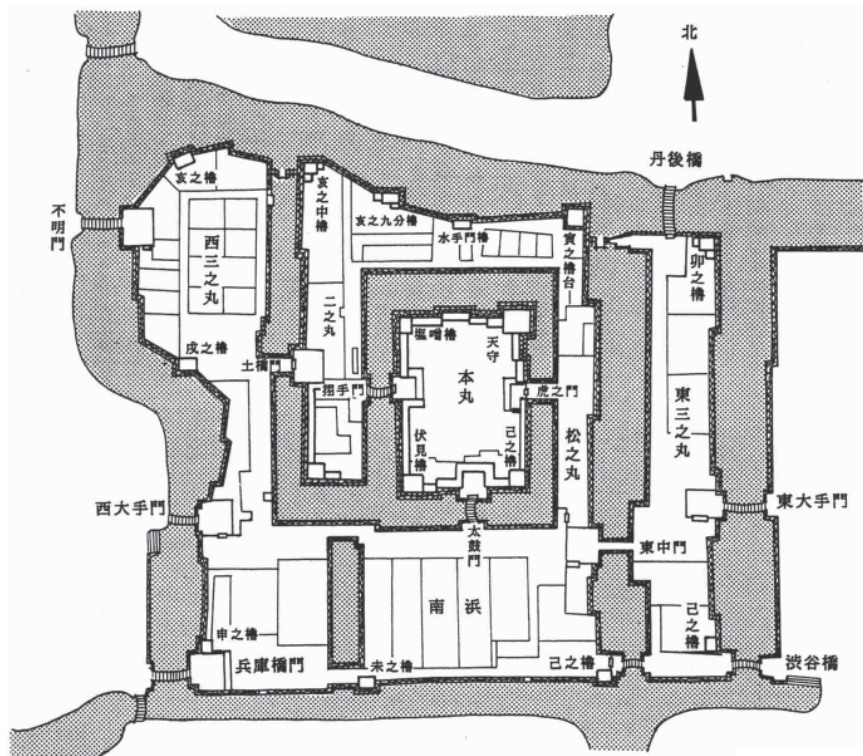
さいごに

いろいろと松江城の縄張りを考えるための検討を行ってきましたが、以上までのところをまとめておきたいと思います。堀尾氏による松江城築城は、基本的にはこの時期の一般的な縄張りに則ったものでした。ただ、城下町も含め全体的な都市造りが築城と同時に進められ、慶長16年までにほぼ完成したと思われませんが、この点については、堀尾氏の並々ならぬ決意と、徹底した意思が感じられるものでした。縄張りについていえば、亀田山の造成、内堀の掘削や高石垣の構築は大規模なもので、東側を限定的に構築するという制約はあるものの、大手道の整備や天守・諸櫓・御殿などが一貫した設計プランの基に構築されました。築城・町造りという一連の事業における基本的なプランが、その後の江戸時代を通じて大きく変更されなかったことをみても、これが優れたものであったことが窺われます。

しかし、譜代大名や幕府方に近い他の城郭で行われた第2期工事とも呼ぶべき、北側・西側の増補・改修は松江城ではほとんど実施されなかったと考えられます。これには福島氏の改易（元和5年）に見るように、元和の一国一城令による幕府の締め付けが大きく影響しているものと思われまます。これに加えて、領内のインフラ整備や城郭・城下町の補修や改修が忙しく、城郭について北側・西側のさらなる築城に踏み出せないまま、藩主家の交代などが続いたことなどが影響したのではないのでしょうか。松江城が慶長12年ではなく、もう少し早く築城を始めていれば、亀田山の北側・西側についても工事が進められた可能性があります。築城初期の段階での躊躇が後々の城郭構造にも影を落としたことは否めないでしょう。しかし、江戸時代を通じてこの姿が維持され、松江城の“かたち”として今日まで親しまれてきました。築城にまつわる歴史的な経過も含めて、この姿こそが尊重されるべきものと思われまます。そのことが先人の歴史を踏まえることでもあるでしょう。

- (注1) 島根県『新修島根縣史通史編』一 1968
- (注2) 山根正明『堀尾吉晴—松江城への道—浜松、富田、松江、城普請の軌跡—』松江市教育委員会『松江市ふるさと文庫』6 2009
- (注3) 早川 圭「彦根城跡本丸御広間の建物遺構について—近世初頭の山城における本丸御殿の再検討—」城郭談話会『近江佐和山城・彦根城』2007
- (注4) 高田 徹「近世城郭における枡形虎口」『中世城郭研究』14号 2000、山上雅弘「枡形虎口」『季刊考古学』第103号』2008
- (注5) 中井 均「虎口『空間』について」織豊城郭研究会『織豊城郭』第6号 1999
- (注6) 千田嘉博「集大成としての江戸城」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集 1993
- (注7) 多田暢久「姫路城」『よみがえる日本の城』4 2004
- (注8) 西島太郎『京極忠高の出雲国・松江』松江市教育委員会『松江市ふるさと文庫』8 2010

尼崎城跡



尼崎城縄張図（松岡利郎1991「尼崎城の特徴」『大阪春秋』第64号 P16より転載）

堀尾期の松江城



「堀尾期松江城下町絵図」(主要部) (島根大学附属図書館蔵)